様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年　６月１３日現在

機関番号：１７１０１
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2007～2010
課題番号：１９５２００４３
研究課題名（和文）　永楽三大全の基礎的研究

研究課題名（英文）　Fundamental study of Yong le san da quan

研究代表者
鶴成　久章（TSURUNARI HISAAKI）
福岡教育大学・教育学部・教授
研究者番号：２０２９４８４５

研究成果の概要（和文）:「永楽三大全」中の各「大全」について、それぞれが基づいた藍本の問題や引用文献の種類・内容といった根本的な問題について考察し、あわせて基礎的な版本調査を行った。また、「永楽三大全」の解釈に準拠することが求められた明代の科挙試験における「永楽三大全」の位置づけについて具体的な考察を行った。さらに、「永楽三大全」が東アジア儒教文化圏の学術・思想に与えた影響やその位置づけについても基礎的な考察を行った。

研究成果の概要（英文）: For the problem of the sources which "Yong le san da quan" was based on and the kind of references cited of "Yong le san da quan" inside, I performed basic study. And, I conducted a fundamental investigation into various printed books of "Yong le san da quan". Furthermore, I performed a detailed study about the influence that "Yong le san da quan" gave in civil examination which was required to be based upon interpretation of "Yong le san da quan". In addition, about the influence that "Yong le san da quan"" gave in the learning and the thought of East Asia, I performed basic consideration.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	700,000	210,000	910,000
２００８年度	900,000	270,000	1,170,000
２００９年度	700,000	210,000	910,000
２０１０年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
総　計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：哲学・中国哲学
キーワード：永楽三大全、五経大全、四書大全、性理大全、科挙、儒教文化

１．研究開始当初の背景

いわゆる「永楽三大全」は、宋から明初にかけての頃の経学・性理学の成果を集大成した書物であり、この「永楽三大全」の正確な理解抜きには明永楽年間以降の中国はもとより東アジア儒教文化圏の学術・思想の正確な把握は不可能である。しかしながら、その重要性にも関わらず、本研究を開始した当初の頃の「永楽三大全」をめぐる研究状況は極めて不十分なレベルにあると思われた。すなわち、当時の「永楽三大全」に関する研究の大勢は、基本的に明末清初期以来の「大全」批判の学説をそのまま踏襲するばかりで、客観的な視点からの研究はほとんどなく、わずかに数名の台湾の研究者が、先駆的な研究成果を徐々に発表し始めた段階であった。

２．研究の目的

本研究においては、「永楽三大全」中の各「大全」について、それぞれの「大全」が基

づいた藍本の問題や引用文献の種類・内容といった根本的な問題について基礎的な考察を行うことを通じて「永楽三大全」の特質を明らかにすること、「永楽三大全」の各種版本についての基礎的な文献調査を行うこと、そして、それらを踏まえて「永楽三大全」が明永楽年間以降の中国及び東アジア儒教文化圏の学術・思想に与えた影響や担った役割といった問題について多角的な観点から考察を行うことを目指した。

３．研究の方法

（１）まず『五経大全』に関しては、①『詩伝大全』と劉瑾撰『詩伝通釈』との関係、②『春秋集伝大全』と汪克寛撰『春秋胡伝纂疏』との関係、③『周易伝義大全』と董楷撰『周易伝義附録』・董真卿撰『周易会通』・胡一桂撰『周易伝義附録纂疏』・胡炳文撰『周易本義通釈』の四書との関係、④『書伝大全』と陳櫟撰『尚書集伝纂疏』・陳師凱撰『書蔡伝旁通』の二書との関係、⑤『礼記集説大全』と陳澔撰『礼記集説』との関係について、それぞれの文献を詳細に比較分析することによって考察することとした。⑥また、『四書集註大全』については、倪士毅撰『四書輯釈』との関係を中心に同様の考察を行うこととした。

そして、この①～⑥の考察と同時に、各「大全」が藍本とする書物以外にいかなる経学著作をどのようなかたちで取り込んでいるのかという点についても調査することとした。

⑦さらに、『性理大全書』については、いかなる性理学文献のどの箇所を選択して採録しているのかという問題について考察することとした。

上記のような内容面の考察に加えて、「永楽三大全」の各種版本についての書誌学的な調査も行うこととし、特に明内府刊本の『五経大全』『四書大全』に関する調査に重点的に取り組むこととした。

（２）①明永楽年間以降の中国における「永楽三大全」の影響と位置づけについて、科挙制度・陽明学との関係を中心に詳細に考察を行うこととした。

②また、東アジア儒教文化圏の学術・思想における「永楽三大全」の影響と位置づけに関しても、江戸時代の儒学者が「永楽三大全」をどのように受容したかという問題、中国における「永楽三大全」の位置づけと日本における位置づけとの相違といった問題について基礎的な考察を行うこととした。

４．研究成果

（１）2007 年度から当初の計画に従い、『詩伝大全』『春秋集伝大全』『周易伝義大全』『書伝大全』『礼記集説大全』『四書集註大全』『性理大全書』の順に、各「大全」について、それぞれが基づいた藍本の問題や引用文献の種類・内容といった根本的な問題について基礎的な考察を行った。

そして、まず最も基本的なことして、「永楽三大全」中の各「大全」は、その書名が示すところとそれに対応した内容とを正確に把握して理解すべきことを、これまでに発表した各論考において明らかにした。

例えば、『周易伝義大全』は、坊刻本などでは『易経大全』と題するものが多いが、『周易伝義大全』はあくまでも程頤の『易伝』と朱熹の『周易本義』の「大全」であり、『周易伝義大全』は程・朱の学説によって易学を闡明するための書物であるという基本的性質を有する。その編纂の主たる目的は、科挙試験における『周易』の解釈が程・朱学を基準とすべきであることを受験生に対して明確に示すことであったが、さらには、それにより程・朱の学説を体制教学として天下に広めることを意図したものであった。なお、言うまでもなくこのことは他の『五経大全』、『四書大全』についても同様である。

また、『性理大全書』についても、坊刻本などには『性理大全』と題するものが多いが、その内容からして、『性理大全書』は「大全書」であり、『五経大全』『四書大全』の各「大全」とは編纂のスタイルと目的が異なることに留意しなければならない。

もっとも、そもそも「永楽三大全」については、胡広をはじめとする編纂者たちの人格や編纂の態度に対する後世の学者たちの批判が非常に厳しく、その内容までもが全否定されがちであり、現実に果たした役割と意義が従来正しく評価されてきたとは言い難い。だが、より客観的な視点から見れば、たとえ藍本の存在を認めるにしても、「永楽三大全」が全く内容に乏しい俗書であると切り捨てることは決してできないということを本研究では明らかにした。

なお、上述の成果の一部は、『概説 中国思想史』の第一部・第七章「明代」の内容に一部反映させた。

ところで、「永楽三大全」中の各「大全」の藍本の問題については、『五経大全』中の各「大全」については基礎的な考察をほぼ終えることができた。その結果、『四庫全書総目提要』、『日知録』、『経義考』等の諸書に見られる「永楽三大全」に関する指摘を修正あるいは補足できる知見が少なからず得られた。しかしながら、『五経大全』については、結果として、陳恒崇氏が 2009 年に発表した「《五経大全》纂修研究」（『古典文献研究輯刊』第八編第七冊）の成果をほぼ追認するかたちとなった。本研究を遂行していた 2009 年度以前の時点では、陳恒崇氏の研究につい

ては、『書伝大全』と『礼記集説大全』に関するものしか把握していなかったが、2010 年に『五経大全』の全てに対して陳氏が行った研究の成果を詳細に知るに至った。その結果、本研究で得られた成果を独自の論考として発表するためには、今後さらに別な角度からの分析を積み重ねた上で研究を一層発展させる必要があると考えている。

また、『四書集註大全』と『性理大全書』については、「『四書集註大全』成立考（仮称）」と題する論文を執筆中であるほか、他にも準備中の論考がある。

一方、「永楽三大全」の版本調査に関しては、国内外の漢籍所蔵機関で数次にわたる調査を行った。特に、『五経大全』に関しては、国立国会図書館が所蔵する明内府刊本について詳細な調査を行い、『四書大全』に関しては、蓬左文庫が所蔵する明内府刊本を中心に調査を行った。ただ、坊刻本まで含めると版本の種類が当初想定した以上に多く、現状ではまだ基礎的な知見が得られたのみであり、今後継続的な調査の必要があると考えている。

（２）「永楽三大全」が明永楽年間以降の中国の学術・思想に与えた影響に関する研究として、明代の科挙制度との関係、陽明学との関係を中心に様々な考察を行った。

その関連の研究成果としては、まず、「王守仁の白鹿洞書院石刻をめぐって―『大学古本序』最終稿の所在」がある。これは、『四書集註大全』の「四書」学説を抜本的に批判した王守仁の「大学古本序」執筆の思想的背景について考察した研究である。

また、明代科挙試験の会試・郷試の第一場の「四書義」と『四書集註大全』との関係をめぐる研究として、「明代科挙と陽明学―楊起元の制義を中心に」を発表した。この発表は、明代科挙の「四書義」においては、『四書集註大全』の解釈に準拠して答案を作成することが求められていたが、その規定に従わずに『四書集註大全』の学説を逸脱する内容の答案を書いた楊起元という人物の思想に注目して考察を行ったものである。

さらに、「明代会試判巻標準考」という論考も発表した。明代の科挙試験においては、「永楽三大全」が受験用の国定教科書の扱いを受けており、実際の試験答案を見ても、会試・郷試の試験内容と「永楽三大全」の内容とが極めて密接な関連を有していることが明らかである。つまり、受験生は基本的に「永楽三大全」の内容に基づいて学習を積み重ねた上で試験に臨み答案を作成し、一方、答案審査を行う試験官の側でも、「永楽三大全」の観点に従って答案を審査したわけである。この論考は、そのような事実を考慮し、明代会試の実施記録である「会試録」の内容のうち、試験官が模範答案に対して記した批評の分析を中心に、明代会試における答案審査の観点について多角的に考察したものである。

他方、明永楽年間以降の東アジア儒教文化圏の学術・思想の特質と「永楽三大全」との関係をめぐる問題についても基礎的な考察を行った。

例えば、江戸時代の儒学者が「永楽三大全」をどのように受容したかという問題について、明版・清版の「永楽三大全」に残された書き込みの内容の分析を通じて基礎的な考察を行った。また、中国の研究者の協力を得て明清期の中国における「永楽三大全」の位置づけと江戸時代の日本における位置づけの相違についても初歩的な比較考察を行った。

さらに、上記の研究と関連して、科挙という制度そのものに対する江戸時代の儒学者たちの興味と関心の在り方についても考察を行い、その成果の一部は学会発表（天一閣《明代登科録》大型蔵書之謎　兼論伝入日本的《明代登科録》）の内容に反映させた。

なお、研究を開始した当初は、「永楽三大全」は『四庫全書』本が最も閲覧が容易なテキストであったが、それでも影印本を複写する以外に全文を入手する手段は乏しかった。しかしながら、その後各種漢籍のデータファイルが割合廉価で分売されるようになり、「永楽三大全」についても、『四庫全書』本のテキストデータが極めて入手し易くなっている。今後、そのような研究資料をとりまく環境の変化をも見据えながら、本研究をより発展させてゆきたいと考えている。そのため、当面は上述の積み残した課題の解決に専念した上で、次のステップに向けた土台作りを行うべく、2011 年度は新たな科学研究費の申請を行わず、本研究に継続して取り組んでゆきたいと考えている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計８件）

① 鶴成久章、天一閣《明代登科録》大型蔵書之謎　兼論伝入日本的《明代登科録》、『科挙学研究叢書―科挙与明代科挙文献』、2011 年（出版予定）、査読有り
② 鶴成久章、明代会試判巻標準考、考試研究、第６巻・第１期、92～108 頁、2010 年１月、査読有り
③ 鶴成久章、王守仁の白鹿洞書院石刻をめぐって――「大学古本序」最終稿の所在、陽明学、第 20 号、83～103 頁、2008 年３月、査読無し

〔学会発表〕（計５件）

① 鶴成久章、天一閣《明代登科録》大型蔵

書之謎　兼論伝入日本的《明代登科録》、科挙与明代科挙文献国際学術研討会、2010 年 12 月 20 日、寧波大酒店会議場

② 鶴成久章、明代会試判巻標準考、第五届科挙制与科挙学研討会、2009 年８月 28 日、北海道大学百年記念会館

③ 鶴成久章、明代科挙と陽明学――楊起元の制義を中心に――、東方学会第 58 回全国会員総会、2008 年 11 月８日、京大会館

④ 鶴成久章、王守仁之白鹿洞書院石刻発微、東亜書院与儒学国際研討会、2007 年 10 月 22 日、湖南大学岳麓書院

〔図書〕（計１件）

湯浅邦弘、ミネルヴァ書房、『概説 中国思想史』、2010 年、145～164 頁

６．研究組織

(1)研究代表者

鶴成　久章（TSURUNARI HISAAKI）

福岡教育大学・教育学部・教授

研究者番号：２０２９４８４５